論文審査の結果の要旨

報告番号	乙 第 1253 号	氏名	小 林 聡
論文審査担当者	主 査 竹下 敏一 副 査 副島 雄二 ・ 田中 直樹 ・ 横山 純二		

（論文審査の結果の要旨）

Helicobacter pylori（*H.pylori*）は慢性胃炎、胃十二指腸潰瘍、胃癌、MALT リンパ腫と関連する最も一般的な細菌であり、治療として除菌療法が広く行われている。成人では除菌療法の有害事象は軽度で頻度は少ないと報告されているが高齢者では検討されていないため、今回、高齢者に対する *H.pylori* 除菌療法の有効性と安全性を検討した。2013 年 1 月から 2017 年 12 月に北信総合病院で *H.pylori* 除菌療法を施行した 1271 名を後ろ向きに解析した。65 歳未満を若年群、65 歳から 74 歳を高齢群、75 歳以上を超高齢群と 3 群に分けて検討を行った。血清抗体価、尿素呼気試験、便中抗原検査、病理組織学検査のいずれかで陽性と判定されたものを *H.pylori* 感染と診断した。全症例で除菌療法前に上部消化管内視鏡検査を行った。治療レジメンは 3 剤併用療法で、1 次除菌を施行し 4 から 8 週間後に尿素呼気試験を行い、陽性と判定された場合は 2 次除菌を施行した。尿素呼気試験で治療効果を判定した。有害事象の有無、内容をカルテベースで確認した。

その結果、小林は次の結論を得た。

１．除菌理由は慢性胃炎 77.0%、胃十二指腸潰瘍 16.4%、胃癌治療後 5.4%であった。

２．1 次除菌を施行した 1133 名中、除菌成功率は 92.1%、有害事象発現率は 9.1%であった。

３．2 次除菌を施行した 146 名中、除菌成功率は 84.2%、有害事象発現率は 8.9%であった。

４．有害事象は下痢 51.7%、皮疹 12.9%、便秘 7.8%であった。14 名は皮疹のため治療を中断した。

５．超高齢群は他の 2 群と比較して慢性胃炎に対する施行率が有意に低く、胃十二指腸潰瘍と胃癌治療後に対する施行率が高かった。

６．3 群間で治療レジメンや有害事象発現率、除菌成功率には有意差を認めなかった。

以上より、*H.pylori* 感染症に対する 3 剤併用療法は高齢者にも有効で安全であることが判明した。超高齢者に対しては、臨床医が有害事象の危険性が高いと判断して処方を躊躇している可能性が考えられるが、本研究の結果は 75 歳以上でも治療を差し控える必要はないことを示唆している。*H.pylori* の感染経路はまだ完全には分かっていないが、家族内感染の報告もある。拡大家族では超高齢者にも除菌療法を行うことで、小児への感染を防止できる可能性がある。

よって、主査、副査は一致して、本論文を学位論文として価値があるものと認めた。